



野球詩

～僕らのグラウンド～

まつもとひろし

狭い、狭い原っぱで野球をしていたら、
近所のおじさんがやってきた。

こんな、こんな狭い所で野球をやっている、
ちっとも面白くないでしょう、て言うんだよ。

そんなことはないのに。
ベースが一個少なくても、すぐにホームランになっても
僕らはとっても面白いのに。

向こうに大きな原っぱがあるよ、とおじさん。

知ってるよ。でも、草がボーボー生えてるよ。

そうなんだよね。困ったね。みんなでなんとかしようか、とおじさん。

なんとかって？

みんなで草刈りしようか！とおじさん。

草刈り？

次の日曜日。

僕らは草ボーボー原っぱに集合した。

ボーボー草は、僕らよりも背が高い。
風に揺られて、ボーボーと声を出す。

近所のおじさんやおばさんがやってきた。

みんな手に鎌を持っている。

なぜか、ボーと立ったまま、動かないおじいさんもいる。

さあ、みなさん、今日中に、きれい、さっぱり、刈ってしまいましょう。

おじさんは僕らに言うよ。この原っぱは君たちのグラウンドだよ。
いいだろう。

専用グラウンド。うん！　すごい、すごい。

みるみる草が刈り取られていく。
僕らも刈られた草を集めていく。
原っぱのすみっこには、刈りとった草が山のように積み上がっていく。

夕方、ボーボー原っぱは、さっぱり、すっきり。
ついに僕らのグラウンドになった。

おじさんは、グラウンドの真ん中で、
山となったボーボー草に火をつけた。

モクモクと煙が空に昇っていく。
僕らは急にインディアンになった。
ハイホー、ハイホーと叫びながら、僕らは火の回りを走る。
僕らが走ると、空気が動いて、煙が僕らを追いかけてくる。

次の日から、学校が終ると、僕らはグラウンドに集まった。
僕らのグラウンドは、本当に快適だった。

とっても広い。
土も少しだけやわらかいから、転んでも痛くない。

ちゃんとした野球ができる。なんて幸せなんだろう。
暗くなって、野球ができない時も、僕らのグラウンドは、
僕らの専用あそび場だった。

花火もやったよ。一杯、空に打ち上がった。
花火がなくなると、みんなで夜空を見上げたよ。
専用のプラネタリウムさ。

一年後。

えっ?!

僕らのグラウンドには、新しい家が6軒も建つという。

おじさんは、その中で一番大きな家に住みたい。
僕らと会った時、おじさんは、やあ、と言った。
ちょっと恥かし気だった。

だから、僕らはまた、あの狭い、狭い原っぱで、野球をやっている。
ベースがまた一つ少なくなったけど、とっても楽しいよ。

ホームランを打って、一周すると、あの日の焚き火を思い出す。
また、インディアンになった気分だよ。

インディアンは、嘘つかない。
僕らの野球も、僕らの遊びも、決して、嘘つかない。

正々、堂々と、僕らのグラウンドで、今日も戦うよ。